

湖畔にある保育所のひとつで、坪井美香さんの〈語り〉の会があるというので、夫婦ででかけた。坪井美香さんは舞台女優で、なおかつ〈語り〉という分野で活躍されている女性。縁ある山中湖のために、ボランティアでその企画を引き受けられたという。

半年前にやはり保育所で、彼女の「ごんぎつね」を幼児たちにまじって聴かせてもらった。朗読でもないし、演劇でもない、この〈語り〉という表現を、そのときはじめて体験して、たいへん関心をもった。子育て支援センターの小俣とみさんという、感度のよいアンテナをもつ職員の方が、こういう地味だが温かい企画をたびたび導入している。

そして今回は、幼児のいない保育所の一室で、若い親御さんたちといっしょに聴かせてもらったのだ。はじめは、言葉と人とのかかわりについて、坪井さんなりの考え方を話され、その合間に、寺山修司の「HAPPY DAYS」、東北地方の昔話「竹の精とかごや姫」そしてさいごに安房直子さんの「鳥」を語ってくださった。

坪井さんは、すわったままの姿勢で語られるのだが、お顔の表情や両手の上げ下げ、登場人物の各声色で、物語がすすんでいく。現実と幻想が交差する安房直子さんの独特の世界にもれず、「鳥」もなかなかの圧巻であった。その部屋の聴衆が20分の間、全員でどこかの異星にとび、物語が終るとともに、再びゆるやかに地球に着地したかのように感じた。

帰り道、夫は坪井美香さんの弟子になると宣言して、わたしをおどろかせた。